読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

第６回全国学生英語プレゼンテーションコンテストで最優秀賞を受賞した崇城大学の３人（記事２・３面へ）

巻頭特集 研究成果や提案 熱い発表続々
第6回 全国学生英語プレゼンテーションコンテスト 2･3

国際舞台に羽ばたく力
高円宮杯 第69回 **全日本中学校英語弁論大会** 4･5

17歳の情熱が生んだ主権者教育授業 岐阜・今須中 6･7

新聞@スクール 新聞・活字に親しむきっかけに 8･9　NRI学生小論文コンテスト 11

出前授業 青山学院初等部×野村ホールディングス　京都・洛南高校付属中×7企業 10･11

リレーエッセー　英キングズ・カレッジ・ロンドン「ロンドン中心部でグローバル問題に取り組む」 12

2017.12
Vol.36

第6回 全国学生英語プレゼンテーションコンテスト

研究成果や提案 熱い発表続々

論理的な思考力、説得力を、画像や映像資料を交えて英語で競う「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」（主催・神田外語グループ、読売新聞社）が9日、東京都千代田区のよみうり大手町ホールで開かれた。質疑応答の配点が従来の2倍となった第6回の今年は、全国の大学・専門学校など127校から、641人が応募。2次予選を勝ち抜いた個人5人、グループ5組が熱のこもったプレゼンテーションを繰り広げた。

2017年のテーマ

1. ラグビーワールドカップ2019日本開催、キャンプ地をわが町に！
2. 日本の本の英訳版翻訳を売り込め！
3. 地球を守れ！環境保全の新技術を発表
4. 新たなネット活用法を提案！資源の共同利用

優秀賞 個人の部 ラグビーW杯公認チームを誘致 THEME 1

ジョンソン・セバスチャンさん 東京外国語大3年

ジョンソンさんは今春まで2年間、沖縄の名桜大に在学した経験を生かし、ラグビーワールドカップの公認チームキャンプの読谷村への誘致を提案した。

最初に、沖縄は、スポーツに適した温暖な気候に恵まれていると説明。中でも読谷村は、都市部の那覇市とも、豊かな自然が広がる山原地域とも近い、地理的な強みがあると話した。さらに、読谷村の若年層の人口比率が日本平均より高いことを紹介。実現すれば、若者たちの国際化を促すとともに、ラグビーへの興味を喚起できると訴えた。

ジョンソンさんは、沖縄出身の母とカナダ出身の父の間に生まれ、北海道で育った。沖縄が持つパワーが「もっと評価されるべきだ」と考え、このテーマを選んだ。発表では、ピンクのかりゆしウェアを着用。自分が撮影した沖縄の写真を使い読谷村の魅力を語る熱さが、審査員の心をつかんだ。挑戦2度目の快挙に「オリオンビールで乾杯したい」と笑顔を見せた。

かりゆしウェアで発表のジョンソンさん

文部科学大臣賞 最優秀賞 研究成果世界へ THEME 3

古賀碧さん 崇城大大学院1年 **チャン・テイ・ジウ・ヒエン**さん 同大3年 **後藤みどり**さん 同大4年

3人は大学の起業部の仲間。白衣に身を包んで理系らしさをアピールし、息の合った発表で頂点を極めた。

取り上げたのは、光合成細菌を用いた環境保全プロジェクト。起業を目指して取り組んでいる研究内容を、グラフや画像、動画を効果的に使って発表した。

化学肥料や農薬を使うと土壌がダメージを受け、作物や地下水も汚染される。自然由来の光合成細菌を使えば、作物の病気を予防するだけでなく、収穫量の増加、品質の向上にもつながる。ただし、100リットル当たり9000円以上かかるコストがネックだった。

3人は、熊本名産・球磨（くま）焼酎の粕（かす）と水、光合成細菌を混合することで、光合成細菌の性質を保った溶液を作り出すことに成功した。「クマレッド」と名づけた溶液は、100リットル当たり3500円。環境に優しいだけでなく、作物の品質も向上するため、1反当たり9万円の収入増加が見込まれるという。

ビジネスモデルとして確立するため、国内の農家と対話をし、タイへ市場調査に行くなどした。その上で、事業を始める場所としてタイやベトナムがふさわしい、と結論づけた。

審査員からは「自分たちの経験を見事に表現した、分かりやすい発表。説得力があった」と講評された。

「光合成細菌が環境問題を解決するという重要性を、日本だけでなく世界に広めたくて参加した」とリーダーの古賀さん。白衣を着た理由を、ヒエンさんは「研究者だという心を忘れたくなかった」と説明。後藤さんは「賞に恥じないようにやっていきたい。実現したい社会に向け、改めて今日がスタート」と決意を新たにしていた。

白衣に身を包み発表する古賀さん（右）と後藤さん

インプレッシブ賞 個人の部 THEME 4

西井勇希さん 中京大4年

インプレッシブ賞 グループの部 THEME 2

池京香さん 都留文科大3年
山田倫子さん 同

優秀賞 グループの部 美容師と顧客つなぐサービス THEME 4

宗像美月さん **三橋咲那子**さん 国際教養大3年

2人は高校時代からの友人。美容師と顧客をつなぐプラットホームサービス「Ready」を提案した。

まず、日本では美容師免許を持つうち40％の人しか、実際に美容師として働いていない現状にふれ、主に、女性が結婚や育児のために仕事をやめるケースが多いと指摘した。一方、女性の中には髪のセットなどが苦手で、パーティーなどの際、プロのサービスを頼みたいと思っている人がいる。

両者をつなぐ「Ready」なら、美容師は長時間労働に縛られることなく仕事ができ、同時に顧客は自宅で気軽にヘアメーキャップを楽しめるようになると説明。単なるサービスの創出にとどまらず、普及させていくことで「女性の新たなライフスタイルを作り出すことが出来る」と訴えた。

昨年の大会の帰り道で再挑戦を決め、テーマが発表された翌日から準備を重ねてきた。納得するまで2人で徹底的に議論を重ねた結果が、審査員の質問への的確な回答につながった。

宗像さん（左）と三橋さん

最優秀賞の（左から）後藤さん・ヒエンさん・古賀さんに記念品の贈呈をするシーガル在日米国大使館領事部副領事

全国学生英語プレゼンテーションコンテストは、グローバル社会での活躍を目指す学生たちにスキルアップの場を提供しようと、2012年に始まった。その年のテーマから一つを選び、それに沿って原稿を作り、プレゼンテーションをする。1次予選、2次予選を通過した個人・グループが本選に臨む。制限時間は10分以内で、その後、審査員による英語の質疑応答がある。審査項目は、内容・構成（50点）、口頭発表力・説得力（30点）、質疑応答（20点）。

【後援】文部科学省／外務省／米国大使館／国立大学協会／公立大学協会／日本私立大学団体連合会／東京都専修学校各種学校協会／全国外国語教育振興協会／ラグビーワールドカップ2019組織委員会／出版文化産業振興財団 【協賛】共立メンテナンス／イオン／フジタ／みずほ銀行／三菱商事 【特別協力】全日本空輸／AOKI／イオン環境財団 【協力】観音温泉／三京エンタープライズ

審査員から

コンテストを終え、決勝の舞台に立った出場者全員と主催者代表、審査員が記念撮影

予想外の質問も考えて

沼田貞昭 審査員長
日本英語交流連盟会長

現代的な課題をわかりやすく解説する発表ばかりだった。準備してきたことを自信をもって発表するのも大事だが、予想外の質問をされた時にも答えられるよう、関連事項まで深く考えを巡らせておくことが、課題だろう。

スキルと創造性 実感

ミシェル・シーガル 氏
在日米国大使館領事部副領事

全国から集まった皆さんに、英語という外国語で話すスキルと創造性を見せてもらった。この英語学習を継続して、できれば英語を学ぶ上で様々なプログラムのある米国に留学してくれることを望んでいる。

議論で戦う力を

杉浦康之 氏
東洋文庫専務理事

ビジネスの世界ではプレゼンテーションなしで質疑応答になることも多い。どの発表も準備していたが、少したたかれ足りない気もした。どんな質問にも答えられる、議論で戦う力を身に付けてほしい。

理解しやすい話術を

鈴木武生 氏
アジアユーロ言語研究所代表取締役

日本人は、相手の興味より自分の好みを優先して話す傾向がある。相手に理解してもらえるよう話す技術を身に付けることが、国際社会で活躍するために必要になってくるだろう。

大会のレベル向上

ウィリアム・スポサト 氏
コメンテーター・ライター

皆さんのスピーチから私も多くのことを学ばせてもらった。ビジネスの世界では、プレゼンテーション能力が非常に重要になってきており、このコンテストの存在は重みを増している。レベルも高くなった。

環境問題 質の高さ

竹本和彦 氏
国連大学サスティナビリティ高等研究所所長

環境問題について、現場の情報も取り入れた質の高い発表が多かった。これからも英語でのコミュニケーション能力の上達に努め、将来のキャリアにつなげてほしい。

スポーツ大会招致に必要

徳増浩司 氏
アジアラグビー会長

ワールドカップを日本に招致する上で、英語のプレゼンテーション能力は重要だった。今後、多くのスポーツ大会を日本に招致するためにも、こうした場で若い人が英語のスキルを磨くことが大切だと思う。

テーマ絞って集中を

トム・ベーカー 氏
ジャパン・ニューズ記者

他人の前で話すのは緊張する。ましてや母国語以外で話すのは勇気がいる。みんなよくやった。ただ、概略の説明に時間をとると、聴衆は飽きてしまう。テーマを絞り、二つのことに集中して話すようにしたい。

高円宮杯 第69回

全日本中学校英語弁論大会

高円宮杯第69回全日本中学校英語弁論大会の決勝大会が11月24日、東京都千代田区の有楽町よみうりホールで開かれ、浜松市立佐鳴台中3年の豊田亜美奈さん（15）（浜松市）が1位に選ばれた。各都道府県での予選大会を勝ち抜いた代表生徒151人が11月22、23の2日間にわたり決勝予選大会に出場。上位27人が決勝大会に進んだ。同区内幸町の帝国ホテルで開かれた記念レセプションでは、アン・バリントン駐日アイルランド大使らがあいさつ。豊田さんら上位3人はその後、約700人の出席者を前にスピーチを披露した。

高円宮妃久子さまから優勝杯を受ける豊田さん

国際舞台に羽ばたく力

1位 豊田亜美奈さん

たくましく生き抜く決意

1位の豊田さんはアフリカ出身の父親と日本人の母親の間に生まれた。生まれも育ちも浜松市で、「平均的な日本の家族と何ら変わらない生活」をし、日本語で育った。

英語が好きで熱心に取り組んできたが、外見上、周囲からは「外国人だから」と、できて当然のように言われる。一方で、日本史が得意だったり、日本語を滑らかに話したりすると驚かれる。

こうした反応に違和感を覚えながらも、豊田さんは「差別に悩まされるかどうかを選ぶのは私たち自身」と受け止め、人生をたくましく生き抜く決意を語った。最後は「I am Japanese（私は日本人です）」と静かに締めくくり、喝采を浴びた。

発音の素晴らしさや生き生きとした言葉の選び方に加え、卓越した間の取り方なども高く評価された。英語の映画を見ながらスピーチを研究し、鏡の前で1日に約3時間の猛練習を重ねてきたという。

受賞後、豊田さんは「1位がとれてほっとした。家族に応援してくれてありがとう、と言いたい」とほほ笑んだ。

2位 太田みらの さん

私たちで世界をより良く

2位の太田さんは、家族との外食の際に、食べ物の持ち帰り袋を知ったエピソードから語り始めた。

食品廃棄に関心を持ち、調べてみると、世界では毎年13億トンの食べ物が無駄に捨てられていることを知った。ショックを受けた太田さんだが、「あなたが動けば世界は変わる」という言葉が心に浮かんだ。自分の家の中でどのくらいの食べ物が捨てられているかを調べ、家族で買い物や調理の段階から無駄を減らす「No-food-loss Project（食品廃棄をなくすプロジェクト）」に取り組んだ。

ユーモアも交えながら情熱を込めて聴衆に語りかけ、「政府でなくても、家族でできることがある。私たちで世界をより良くしよう」と力強く訴えた。

統計を用いて主張に説得力を持たせたことなどが評価された。

太田さんは受賞後、「将来は英語を生かして、海外で人を助ける仕事に就きたい」と話していた。

3位 溝部和貴 君

助けてくれる人必ずみつかる

溝部君の演題は「Just Being Myself（ありのままの自分）」。発達障害と診断され、小学校では声の大きさや文字を美しく書けないことなどでからかわれたという。

しかし、中学生になって、声の大きさを生かせる号令係を任される。様々な場面での教師や友人の温かい言葉にも励まされながら自信を取り戻していった経験を、堂々と語った。

「努力を重ねながら支援を求めれば、助けてくれる人は必ず見つかる」と訴えた。

力強い声や優れたイントネーション、勇気を出して自分自身の経験を語ったことなどが評価された。

受賞後、溝部君は「（3位は）信じられない。主張が認めてもらえたことが一番うれしかった。声を出すことを恐れず、世界で活躍できる俳優になりたい」と夢を語った。

将来担う青少年育成

69回を数える伝統あるこの大会は、終戦から間もない1949年にスタートした。「将来の日本を担う国際性豊かな青少年の育成」という趣旨に、故高松宮さまが賛同されて創設された。

86年に故高円宮さまと高円宮妃久子さまが大会の理念を継承され、99年から高円宮杯全日本中学校英語弁論大会に衣替えし、現在に至っている。

毎年、校内予選を含め全国から約10万人が参加し、中学生による英語スピーチコンテストでは最高峰の大会として定着している。決勝大会は27校の代表が自作のスピーチを披露して競い合う。上位入賞者には、英国研修を副賞とする三菱商事賞などが贈られる。この大会と全国小・中学校作文コンクール、日本学生科学賞の教育3賞は、半世紀を超える歴史を持つ。読売新聞社が企業と教育現場を結んで様々な教育支援を行う「読売教育ネットワーク」の重要な柱になっている。

読売新聞社とともに大会を主催している日本学生協会基金（名誉総裁・高円宮妃久子殿下）は46年、大学生の組織として発足。同大会の主催・運営にあたってきた。

大会出場経験のある現役大学生ら約60人がメンバーで、出場経験者間の結び付きが強いのも特徴。70年を超える歴史の中で、政財官界やアカデミズム、マスコミの世界など様々な分野で人材を輩出してきた。出場生徒の交流をはかる「全日本中学生会議」を実施するなど、人材育成のための支援も充実している。

主催　読売新聞社／日本学生協会（JNSA）基金
後援　外務省／文部科学省／NHKほか
協賛　日本IBM／三菱商事／べんてる／ワールド・ファミリー／国際ソロプチミスト東京―東、ECC

上位入賞者

- ■1位 **That Is Who I Am**
  豊田亜美奈 さん（浜松市・浜松市立佐鳴台中3年）
- ■2位 **Think Globally, Act Locally**
  太田みらの さん（京都市・私立洛南高校付属中3年）
- ■3位 **Just Being Myself**
  溝部和貴 君（北九州市・私立九州国際大付属中2年）
- ■4位 **A Touch for My Grandfather**
  【アイルランド大使館賞も受賞】
  久保川美羽 さん（高知市・私立高知学芸中3年）
- ■5位 **Let's Enjoy Politics**
  柴田詩菜 さん（浜松市・県立浜松西高校中等部3年）
- ■6位 **Dear My Disease**
  【ワールド・ファミリー賞も受賞】
  小嶋佐和 さん（宮崎県新富町・新富町立富田中3年）
- ■7位 **Omoiyari**
  高　潤河 君（広島市・私立広島学院中3年）

伝えたい気持ち大切

大会名誉総裁の高円宮妃久子さまが、記念レセプションで述べられたお言葉要旨は以下の通り。

まずは受賞された皆さん、先生やご家族の方にお祝い申し上げます。また決勝予選大会、決勝大会に出場された皆さんにもおめでとうと申し上げたいと思います。全てのスピーチを聞くことは出来ませんでしたけれども、原稿は読ませていただきました。それぞれに、訴えたいこと、伝えたいことが明確にあり、そうであるからこそ、説得力のある良いスピーチであることを改めて思った次第です。

先ほど、読売新聞グループ本社の白石興二郎代表取締役会長から、英語はコミュニケーションツールである、というお話がありました。英語を使って自分たちの考えを発信し、世界の人に訴えていく、その第一歩を皆さんが踏み出したことはとても意義深いことです。今や、英語というツールなしでは、十分な情報収集も、自分の考えの発信もかないません。これからは、そのツールを使って伝える内容が大事になってきます。

皆さんには、大いなる知的好奇心と柔軟な頭をもって、色々なことに疑問を抱き、学び、吸収していただきたい。そして、たくさんの点を作ってその点を線でつなげて、網を織り上げてください。網が出来れば、もっと多くのものをキャッチすることができます。それを整理して、賢くまとめることによって、第三者に伝えたいことも増えていくでしょう。

先ほど、アイルランド大使がおっしゃいましたように、今年の夏、日本とアイルランドの国交樹立60周年を祝う展覧会があり、式典に出席するためにアイルランドを訪問しました。この展覧会では、日本から100年前にアイルランドに渡った巻物や刷り物が展示されていました。

興味深いことに、修復とその技術の伝授と継承に焦点を当てていました。外交という表舞台だけではなく、修復のような地味な交流が60年という国交を支えてきた、というわけです。皆様には表舞台だけではなく、裏方としても活躍できる国際的な舞台があるということに着目していただきたいと思います。

改めて、皆さんが羽ばたいていく将来を楽しみに見守っていきたいと思います。素晴らしい高校生、大学生、そして社会人になっていただくことを期待して、私のあいさつといたします。おめでとうございました。

岐阜・関ケ原町立 今須中学校で主権者教育授業

17歳の熱意が生んだ「模擬選挙」

渋谷教育学園渋谷高校
小牧 薫子 さん

岐阜県関ケ原町の今須中学校（白川勇一校長）は山間にある全校生徒33人の学校だ。この小さな学校で11月6日、東京の高校生が考案した主権者教育の授業が行われた。高校模擬国連国際大会・日本代表として磨いたアイデア出しの手法やロールプレイを取り入れた100分間のグループワークでは、自らアシスタントとして活躍。3年生7人のほか、大学生や大学院生ら5人が、架空の市長選の土地利用を巡る公約分析から投開票までを体験した。

写真は今須中学校提供

初めて使う付箋に戸惑った生徒らも、慣れると次々と政策への考えを書き出していった

「総合福祉センターを建設する政策が良いと思う」。こう話す大学院生に待ったをかけたのは中学生だった。テーマパーク建設案を指さして「ここに保育所を併設すれば、より多くの人が得できる政策になる」。

この日、今須中のワークスペースでは模擬投票に向けたグループワークが盛り上がっていた。生徒らが議論するのは人口5万人・高齢化率28％のトップを選ぶ架空の市長選。工場跡地を巡る立候補者4人の公約を分析後、候補者になりきって、どの政策が地域にとって最良かを考えて発表する。

教科担任の藤井健太郎教諭（41）が「教育に一石を投じる異色の授業」と話すゆえんは、学習指導案に一人の高校生の創意工夫が詰まっていたから。藤井教諭とともに生徒らにアドバイスを送る渋谷教育学園渋谷高校（東京）2年の小牧薫子さん（17）だ。

きっかけは直談判

ことの始まりは7月、今須中を訪れた小牧さんの一言だった。「高校の卒業論文で模擬国会を取り上げます。協力してほしい」。

小牧さんは中学時代、クラス対抗で政党を結党、公約作りから選挙・組閣までを生徒が主導する模擬選挙を体験した。読売新聞がサポートした模擬国会では夢中になって論戦を交わした。

「政治が身近にあることが分かった。でも、他校の生徒に聞くと公民の授業は暗記中心。これでは政治に関心を持てない」

そんな危機感から「模擬国会の教育導入」を卒論のテーマに決め、調べるうちに目に止まったのが法務省のウェブサイト。法教育の論文で、藤井教諭が授業での事例を紹介していた。

「この先生に相談しよう」。電話で訪問の約束を取り付け、高校と親を説得した。

小牧 薫子 さん

授業の冒頭、グループワークの進め方を説明する小牧さん。「中学生に数学を教えるボランティアもしていたので、授業作りとの両立が、それはもう大変。勉強時間を削っちゃいましたが、テストの点数は上がった。集中しました……」。人一倍の頑張り屋さんだ。

満を持して校門をくぐった彼女を待っていたのは予想外の提案だった。「模擬国会はできないが、模擬選挙の授業に協力しませんか？学習活動を作ってください」。

託されたのは2時限。「いかに投票の意義を学び、3時限目の模擬投票につなぐか」。小牧さんならではの〝仕掛け〟が求められた。

ここで役立ったのは高校時代に熱中した模擬国連の活動だ。国際大会では各国の高校生が担当国の国連大使になりきり、国家間の利害が対立する難題解決策を競う。その体験を昨年の学習指導案に落とし込んでいった。

メールでのやりとりは31回。徐々に形になっていく指導案を藤井教諭は驚きの目で見守った。「授業の流れこそ昨年と同じだが、私にはない発想が詰まっている」。

独自の工夫で授業づくり

多様なアイデアを整理・可視化して改善するツールとして、小牧さんが取り入れたのが付箋を駆使することだ。

「市の現状と、その理想の在り方は？」「土地利用政策で誰が得をして損をする？難しく考えなくていいんだよ」

小牧さんは手の止まったグループを見つけては声をかけ続ける。最初は戸惑っていた生徒らも、次々と付箋に自分の考えを書き出し、公約を多角的に分析。「政策を工夫すれば得をする人が増えると、生徒が自らアイデアを出し始めたのには驚いた。しかも発想が豊か」。小牧さんは手ごたえを感じた。

最大の工夫はロールプレイの導入と、ロールを途中で切り替えることだ。その特徴を小牧さんは、こう補足する。「授業前半で生徒は立候補者の立場で考えますが、後半は有権者になりきって同じ政策を見る。年齢・性別・社会的立場の異なるロールを全員分準備して、くじで一人ひとりに与えるんです」。視点が変われば政策を見る目も変わることに気づいてほしかった。

「投票で町を変えられる」

生徒らは何を得たのか。〝50代会社員・妻と子1人の共働き〟というロールをくじで引いた三輪彩奈さん（15）は「立場が変わったら別の候補者に1票を入れたくなった。投票によって町を変えられることが分かった」と振り返る。

どの政策にもメリットとデメリットがあり、選ぶのが難しかったと話すのは杉山雄大さん（15）。「18歳になったら情報を集め、しっかり考えて1票を入れたい」と前を向いた。

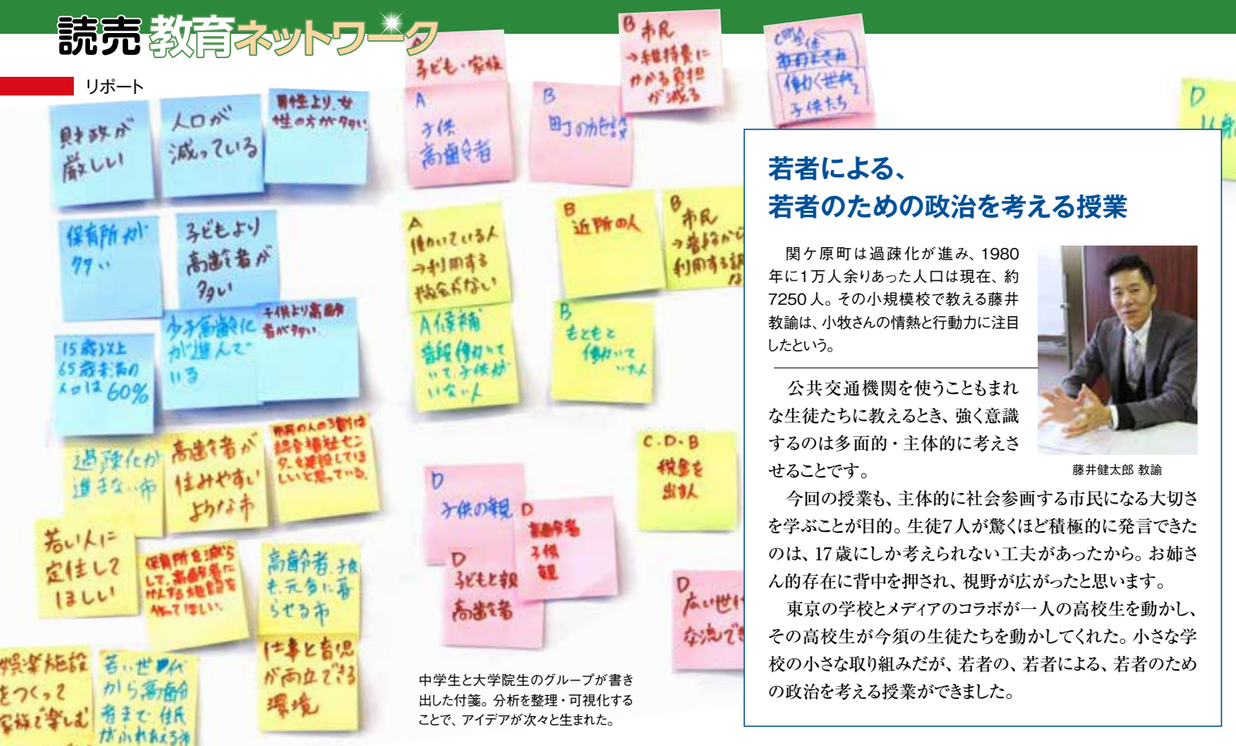
岐阜大学大学院2年で教師を目指している河村美都紀さん（24）も「選挙についてじっくり考える機会は、私が中学・高校のときにはなかった。1票の重みを実感できた」という。

小牧さんは11月中旬、42ページの卒論を提出し、優秀論文の一つに選ばれた。今須中での試みも取り上げ、「ロールプレイを導入したグループワークは投票の意義の理解に有効」と分析している。

6月にはバスケ部を引退して受験モードに入るが、それまでにあと1回だけ主権者教育の授業に関わりたい、求められればどこにでも行きたいと意気込む。なぜ、そこまで力を入れるのかを聞くと、一拍置いて答えが返ってきた。

「今、やるべきことだから。政治について考えるのって大切だと思いませんか？」

くじで性別や年代、社会的立場を決め、その立場から全員が投票した



中学生と大学院生のグループが書き出した付箋。分析を整理・可視化することで、アイデアが次々と生まれた。

若者による、若者のための政治を考える授業

藤井健太郎 教諭

関ケ原町は過疎化が進み、1980年に1万人余りあった人口は現在、約7250人。その小規模校で教える藤井教諭は、小牧さんの情熱と行動力に注目したという。

公共交通機関を使うこともまれな生徒たちに教えるとき、強く意識するのは多面的・主体的に考えさせることです。

今回の授業も、主体的に社会参画する市民になる大切さを学ぶことが目的。生徒7人が驚くほど積極的に発言できたのは、17歳にしか考えられない工夫があったから。お姉さん的存在に背中を押され、視野が広がったと思います。

東京の学校とメディアのコラボが一人の高校生を動かし、その高校生が今須の生徒たちを動かしてくれた。小さな学校の小さな取り組みだが、若者の、若者による、若者のための政治を考える授業ができました。

新聞・活字に親しむきっかけに

教室で新聞を役立ててもらおうと読売新聞紙面で10月から展開している「新聞@スクール」。地域版では、地方支局の支局長らベテラン記者が学校に出向く「出前授業」の様子を掲載している。授業で子どもたちに伝えたいこと、学校側の反応などについて報告する。

読売新聞記者による出前授業は、学校と相談しながら様々なテーマで行われている。その一部を紹介すると――

先生が記者に質問

札幌市北区・市立あいの里東中学校

情報を正確に読み解く力を養う「メディアリテラシー」をテーマに、教諭が記者に質問する形の出前授業が行われた。まず、社会科の結城学教諭が、「内戦が続き飢餓に苦しむスーダンで、やせ細り骨と皮になった少女を、ハゲワシが狙う写真」「朝日新聞のカメラマンがサンゴ礁を傷付けて撮影した捏造（ねつぞう）写真」――などを生徒に示した。ハゲワシが狙う少女の写真は、1994年にピュリツァー賞を受賞したが、「なぜ、ハゲワシを追い払わなかったのか」との批判が巻き起こり、撮影したカメラマンは自殺した。

結城教諭は「記者は、そうまでしてスクープを狙うのですか」と読売新聞北海道支社報道部の平野達雄次長に質問。平野次長は「作られた出来事にスクープはない。作りごと、誇張、演出、脚色はニュースではない。新聞は信頼のメディア」と説明した。

また、結城教諭は新聞各紙を比較して、「取り上げるニュース、内容が違うのはなぜですか」とたずね、平野次長は「新聞社は毎日、編集会議を開き、価値判断をして読者に届けるニュースの優先順位を決めています」と答えた。

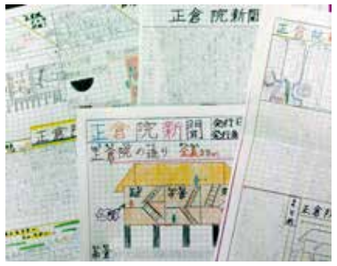
出前授業もとに「正倉院新聞」

奈良市立柳生小学校

「第69回正倉院展」（主催・奈良国立博物館、特別協力・読売新聞社）についての出前授業を基に、6年生が「正倉院新聞」を作成した。

講師を務めた読売新聞大阪本社地方部の持丸直子記者は、特別号「正倉院展へ行こう！」をテキストに、正倉院の歴史や宝物の由来、出展品の見どころに加えて、特別号ができるまでの過程を紹介した。

子どもたちは、図書室で関連本を調べてさらに知識を深め、記事を執筆。注目の宝物を特集したり、1000年を超える保存を可能とした正倉院の構造をイラストで紹介したりと、工夫を凝らした新聞を2週間かけて作り上げた。まとめの部分には、「宝物がとても大切にされていることがわかりました」「この宝物を未来に伝えていこうという人の思いがあったことを知りました」など、率直な感想が書かれている。


正倉院をテーマに児童が作り上げた新聞

模擬記者会見で校長を質問攻め

静岡県伊東市・市立旭小学校

読売新聞静岡支局の月野美帆子支局長が「新聞記者の仕事と新聞の役割」をテーマに話した後、岩間範子校長を取材対象にした模擬記者会見を行った。子どもたちは「なぜ学校の先生になったのですか」「先生になってよかったと思うことは」などと質問攻めに。岩間校長から「みんなが校庭で元気に遊んでいるのを見ると、涙が出てくることがあります」というコメントを引き出して盛り上がった。

「ネット時代のメディア」講義

富山国際大学

読売新聞富山支局の軍地哲雄支局長（当時、現東京本社運動部次長）がサッカーを中心とするスポーツ報道を題材に、インターネット時代のメディアのあり方について講義した。サッカー日本代表の試合を報じた読売新聞の紙面構成を説明した後、ネットメディアは同じ試合をどう取り上げたかを紹介。ネットには速報性や、記者会見での一問一答、多くの選手談話、プレー再生動画などの情報量の多さ、読者もコメントを書き込める双方向性といった特性があると指摘した。

軍地支局長は「では、新聞や雑誌はスポーツ報道には不向きなのか」と学生たちに問いかけ、活字メディアにも、情報を集約した記録性や、幅広い読者を想定した標準性、歴史、文化など他分野にまたがって報じる総合性といった特性があることを説明。総合性の一例として、サッカー・ワールドカップ出場国の実情を現地取材した読売新聞の連載「サッカーの惑星（ほし）」を紹介した。

日本代表戦の紙面構成を説明する軍地支局長

歴史民俗資料館で模擬取材

仙台市泉区・市立八乙女中学校

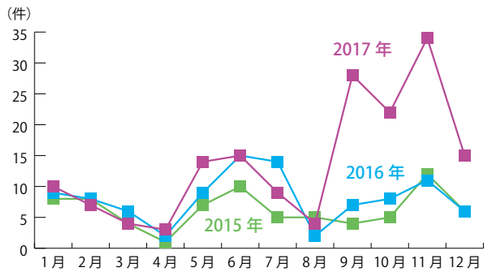
2年生3人が、同市宮城野区の市歴史民俗資料館で模擬取材に挑戦した。明治維新以降、同館が兵舎だった歴史を踏まえ、学芸員が建築の特徴や、第2次大戦前後の兵舎内での生活などについて説明。3人は「兵士の訓練はどれくらい厳しかったんですか」「階段の特徴について教えてください」などと質問。模擬取材を終えた生徒の1人は「メモを取るのが大変でした。頑張って記事にしたい」と話していた。

文章力テーマに授業

福岡市南区・福岡県立柏陵高校

読売新聞西部本社生活文化部の堀家路代記者が「新聞で磨く文章力」をテーマに出前授業。最も重要な情報を冒頭に書くという新聞記事の構成を説明し、「忙しい相手に読んでもらうには、訴えたいことを先に書くことが大切。授業のリポートなどにも当てはまる」と話した。生徒たちはグループに分かれ、記事を並べ替えたり、見出しをつけたりする体験もした。

出前授業の状況（読売新聞東京本社）



読売新聞東京本社の出前授業は、「新聞@スクール」の準備期間だった2017年9月が前年同月の4倍にあたる28件に達した。10月は22件、11月は過去最高の34件にのぼり、4か月間（9～12月）の合計は99件。日曜、祝日を除き、ほぼ毎日のように東日本のどこかで出前授業が行われた計算になる。8月まで主に首都圏周辺の小中高校で実施していた出前授業は、9月以降範囲が一気に広がった。

学校別内訳では、小学校40件、中学校29件で、全体の70%。高校は13件。大学では「就職に役立つ新聞の読み方」など4件、さらに小中学校教諭や学校図書館司書ら向けに教員研修が6件行われた。テーマ別だと、「新聞の読み方」37件、「キャリア教育（記者の仕事）」23件、「新聞作り・書き方・取材の仕方」15件がトップ3で全体の82%を占めた。「主権者教育」は6件だった。

工夫凝らして出前授業

読売新聞千葉支局　森　昭雄　支局長

学校の要望生かして

「新聞@スクール」が始まり、私もこの取り組みの一つである出前授業を、2017年中に千葉県内の小・中・高校延べ16校で行った。その多くは、学校や教育委員会に人脈を持つ各地の読売新聞販売店（YC）にセットしてもらった。編集と販売がタッグを組んだ新たな試みだ。

私は、出前授業の前に一度学校を訪問し、担当の先生と会って授業内容などを打ち合わせることにしている。学習の状況や地域の事情などによって、学校から求められる内容は様々だ。学校側の要望を把握し、子供が家庭や学校で普段どの程度新聞に接しているのかなどを確認したうえで授業に臨んでいる。

私がこれまでに行った出前授業のテーマは、①新聞の読み方 ②新聞社、新聞記者の仕事 ③学校新聞などの作成指導 ④情報リテラシー――に大別できる。内容は異なっても毎回話すようにしているのは、読売新聞は日本全国と海外主要国・地域に記者を配置していること、相手に直接話を聞くのが私たちの取材の基本であり、さらにはそうした取材を経て記者が書いた原稿も、本社や地方総支局のデスクによるチェック、校閲部による点検など誤報・ミス防止のための何重もの「関門」をクリアして初めて掲載されること、の2点だ。

授業終了後、子供たちに感想を聞き、授業の模様を後に読売新聞千葉版で紹介するときに名前入りで載せるようにしている。その際、私たちにとっては当たり前のこの2点が「印象に残った」と話す子供が多い。日常的にインターネットを使い、大量の情報を簡単に集めることのできる今の子供たちにとってはかえって新鮮なのかもしれないが、正確なニュース・情報を迅速に伝え、読者の信頼をかち得るために私たちが日々努力を続けていることは、報道に携わる者としてきちんと話さなければならないと思っている。

もり・あきお
1964年8月生まれ。1988年入社。富山支局を振り出しに、社会部、政治部、地方部、文化部などを経て、2017年6月から千葉支局長。趣味は油絵を描くこと、クラシック音楽鑑賞。
（写真は千葉県野田市立東部中学校で）

授業に参加させる工夫

講師が一方的に話すのではなく、子供が興味・関心を持てるよう授業に参加させる工夫も欠かせない。例えば10月31日に八千代市立高津小の5年生約35人に対して行った授業では、本紙朝刊「気流」欄に掲載された「たまには手紙　書いてみては」という投書を紙に貼り付けて手作りした資料を子供たちに配り、「自分は手紙派か、それとも携帯・メール派か。それはなぜか」を文章に書かせ、発表してもらった。

これは、新聞記事を手がかりに、簡単には答えの出ない問題について自分の頭で考えをまとめ、それを的確に表現することを目指したものだ。限られた時間だったが、担当の先生から後日、「葛藤の生まれる教材を選んでもらい、よかった」との感想を頂戴した。出前授業の内容や使う教材は、授業を行う側が学校側の要望に応じて工夫・改良する必要があると痛感した。

子供たちの反応がいいと、こちらもうれしくなり、「やってよかった」と高揚感や達成感を味わえることもある。だが、そうした自己満足だけで終わるのではなく、若い世代が新聞や活字に親しむきっかけとなったかどうかが問われなければならない。出前授業を行ったら、同じ学校、同じ対象で内容を変えて後日再度実施するなどのアフターケアが必要ではないかなど、回数を重ねるうちに幾つかの課題が見えてきたとも感じている。

サイコロ 振って変動相場 為替レート学ぶ

青山学院初等部 ×野村ホールディングス

野村ホールディングスの「NOMURAまなぼう教室」の出前授業が11月29日、東京渋谷区の青山学院初等部で行われた。授業を受けたのは、初等部5、6年生の総合活動・販売プロジェクトに参加している13人。初等部では社会活動について学ぶために14のプロジェクトがあり、販売プロジェクトは、校内でノートを販売することで経済のしくみなどを学んでいる。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた同社の教材を使って授業を受ける児童ら

この日は、「NOMURAまなぼう教室」のワークシートや東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた同社独自の金融・経済教育のポスター型冊子を使って為替を学んだ。同社の取り組みは、「経済・テクノロジー分野」で東京2020公認プログラムとして認定されている。講師は、同社コーポレート・シティズンシップ推進室金融リテラシー推進課の佐藤由紀さんが務めた。

消しゴム安く輸入するには？

授業はワークシートに沿って進められ、五輪開催国の国旗を見て通貨を当てるクイズ。児童たちは、イギリスやフランス、中国、ブラジル、オーストラリアなどの通貨を「ポンド」「ユーロ」「元」と次々に答えていた。さらに円とドルの為替の問題では、1971年からのドル／円相場のグラフを見ながら1ドル360円だった為替が円高に推移し、現在約111円台になっていることなどを学んだ。

この後、サイコロを使って変動相場を作り出し、アメリカから消しゴムをいかに安く輸入するかのワークを体験した。児童が二つのサイコロを振り、あらかじめ決められた出目で1ドル100円の為替相場が上がったり下がったりする。これを7回行う中で状況を見ながら、一人3回消しゴムを仕入れる。児童らは、1回目で10円の円高、90円になると、消しゴムを手にする人、様子見する人に分かれた。しかし、2回目、3回目で円安になり元の100円に戻ると、皆はサイコロの動きをじっと見つめ「止まれ！」などと歓声が上がる中、5回目で90円になるといっせいに消しゴムに飛びつくなど、にぎやかな授業になった。

「情報に関心持って」

最後に佐藤さんが「私たちのお金の価値は世の中の変化を反映して変わります。テレビや新聞などのニュースでたくさんの情報が出ているので関心を持ってください」と話した。

授業を受けた6年生の水越宥吾君は「世界のお金の種類や単位について知らなかったことをたくさん教えてもらえて良かった」と話した。5年生の水戸まり香さんは「ブラジルのお金の単位を聞かれたとき、『サッカーが好きな人にはわかるヒントです。スペインの有名なプロサッカーチーム名です。（レアル・マドリード）』とヒントをくれて面白かった」と感想を述べた。

News 「新聞タイム」の動画見られます

新聞から気になった記事を見つけて切り貼りし、考えをまとめる「新聞タイム（NIEタイム）」の様子を紹介した動画を、ウェブサイトでご覧いただけます。http://kyoiku.yomiuri.co.jp/torikumi/nie/seminar/contents/post-616.php

「新聞タイム」は、朝学習などの時間を使って子どもたちが主体的に取り組む学習活動です。読む力、書く力、学力が向上するだけでなく、社会への関心も高まると注目されています。動画では、朝学習の15分間を使って週に1回行っている東京都北区立滝野川小学校の実践を紹介しています。

「新聞タイム」のやり方を紹介したリーフレット「やってみよう！新聞タイム」を無料（郵送料は別途必要）で希望校に配布しています。希望部数と ①学校名 ②郵便番号 ③所在地 ④電話番号 ⑤担当教諭名を明記したメモ、送料分の切手（1～2部＝140円、3～4部＝205円、5～7部＝250円、8～20部＝360円）の2点を同封し、以下のあて先にお送り下さい。

【宛先】〒100-8055（住所不要）　読売新聞東京本社
教育ネットワーク事務局　NIE「新聞タイム」係

企業の仕事 社員が紹介

京都・洛南高校付属中 ×7企業

企業と学校の交流を図る「読売教育ネットワーク」の出前授業が12月15日、京都市南区の洛南高校付属中学校で開かれた。

学校を訪問したのは、野村ホールディングス、三菱東京UFJ銀行、積水ハウス、関西電力、東レ、日本航空、読売新聞の計7社の社員。同中の1年生243人に日頃の業務を紹介したり、実験を通じて研究内容を説明したりした。金融教育やエネルギー問題、中空糸膜を使った水質浄化、外国人観光客らへのホスピタリティなど、社会の現状を踏まえた盛りだくさんのテーマが準備されていた。

積水ハウスは地球温暖化対策に貢献する省エネルギー住宅をテーマに授業。断熱材などを研究する同社の出端祐輔さんが「断熱性を高めれば、暖房などに使うエネルギーが少なくて済む」と解説した。

積水ハウスの社員と断熱材の実験をする生徒（京都市南区で）

ドライアイスを入れた箱をガラスや鉄など6種類の素材で蓋をした上で、表面の温度を測り、断熱性能を確かめる実験も行った。ガラスを複数重ねたペアガラスの断熱性が高く、授業を受けた男子生徒（13）は「ガラスの断熱性が高いのは意外。どうして重ねると効果が高まるのだろう」と興味深そうな様子だった。

1/25 赴任前子女教育セミナー（仙台）

公益財団法人海外子女教育振興財団は2018年1月25日午後2時から、仙台市中小企業活性化センター（仙台市青葉区中央1の3の1）で、海外赴任前の家族を対象に子女教育セミナーを開催します。

「海外でのお子さんの教育について」と題した財団の教育相談員による講話の後、質疑応答や教科書購入の手続き、財団のサービスの紹介が行われ、出国前の準備から、現地適応のための留意点、帰国後の学校選択などについての説明があります。

申し込みは財団ウェブサイトのフォームからお申し込みください。定員15人に達し次第、締め切ります。

http://www.joes.or.jp/kojin/funinmae
問い合わせ：同財団教育相談事業チーム
☎03・4330・1352
メールアドレス：sodanjigyo@joes.or.jp

高校生・大学生が地方に提言
NRI学生小論文コンテスト

「読売教育ネットワーク」に新たに参加した株式会社野村総合研究所（略称：NRI）では12月22日、「NRI学生小論文コンテスト」の最終審査を東京都千代田区の同社本社で実施した。論文審査を通過した高校生と大学生各5組が、6分間のプレゼンテーションと質疑応答を行った。

12回目を迎える同コンテストは、今回「地方の課題をイノベーションで解決する。」というこれまでより具体的なメインテーマを提示し、①震災復興 ②地方創生 ③地方の産業改革という三つのサブテーマを設定した。

独創的な発想 ゲームも参考に

今回初めてプレゼンテーション審査が行われた「高校生の部」では、明秀学園日立高（茨城県）2年の堤ともかさんが、大賞に選ばれた。「おじいちゃん☆おばあちゃんGO――多様性を維持し持続的イノベーションを促す主体的な取り組み――」と題し、少子高齢化の最大の問題点は、人の多様性が失われることと主張。多様な人を知るために、身近な高齢者を子どもたちが取材し、電子版のタウンペーパーにすることを提案した。独創的な発想や人気ゲームの「ポケモンGO」をふまえた説明で聴衆を引き付けた。

堤ともかさん

優秀賞は、立命館慶祥高（北海道）3年の柳沼千夏さんと都立国際高2年宮本晏寿（あんじゅ）さんが受賞した。夕張市在住の柳沼さんは、『夕張メロン科』――地方と若者の挑戦」として道立高校への新学科創設を、宮本さんは、軽種馬産業での今夏の1か月の就労体験をもとに、「北海道日高地方に見る一次産業の存続」を提言した。

「大学生の部」では、立命館大経済学部2年の山崎優斗さんと三宅浩太さんが大賞に選ばれた。大学で同じゼミに属する2人は、橋などの老朽化したインフラの建て替えを観光資源にする方策を考えて「建設前から始めるインフラツーリズム戦略 ～インフラ総建て替え時代への提言～」を発表した。

「少子高齢化を良い方向に」

「高校生の部」大賞の堤さんは受賞に驚きつつ、「少子高齢化は悪いイメージが強いけれど、祖父母が大好きなので、少しでもいい方向に転換したかった」と話していた。

2018年の小論文の募集は7月から始まる予定。

宮本晏寿さん

柳沼千夏さん

コンテストの詳細はNRIウェブサイトで→ https://www.nri.com/jp/news/2017/171222_1.aspx

海外で学ぶ・リレーエッセー㊱

英キングズ・カレッジ・ロンドン ロンドン中心部でグローバル問題に取り組む

大阪府立千里高校卒、キングズ・カレッジ・ロンドン2年（執筆時）
後藤（ごとう） 悠香（はるか） さん

RYUGAKU FELLOWSHIP

キングズ・カレッジ・ロンドンの学生としてロンドンの新しい生活に足を踏み入れてから2年が経った。しかし、この多様性ある活気あふれた場所は、私に毎日多くの発見をもたらし、興味や価値観を刺激してくれる。

留学先なら米国、と考える人は多い。しかし私は英国へ、さらに言えば、キングズ・カレッジ・ロンドンへと導いてくれたこの道を選んだことを誇りに思っている。英国の大学の多くは、専攻専門性（subject specialization）を設けている。それは、学生が特定のフィールドの中から興味のある分野を一つ選んで、3年間を通してその分野に特化した勉強をする制度だ。一貫して一つの分野を集中して学ぶことで、卒業後その道のプロフェッショナルとして生活することができる。

私は以前から企業の社会的責任（CSR＝corporate social responsibility）に強い関心を抱いていたので、英国の多くの大学が提供しているこの制度の、この特徴に強く引かれた。経営学科の学生のためにCSRのクラスがあるキングズ・カレッジ・ロンドンを選んだのは、私にとってはとても自然なことで、それはこの大学を選んだ決定的な理由であったように思う。

このコースで学ぶことは、私に「正しさとは何で、それはどこにあるのか」といった様々な問いをもたらした。クラスの中で学生たちは、実際のビジネスのケーススタディーだけでなく、学問的視野からみた経営についても討論する。そこで、学問的理論は完璧に見えるが実社会においてはしばしば当てはまらないことがある、ということに気が付いたのだ。このジレンマのおかげで、私は実社会の中で「正しい決定」の存在について疑問を持つようになり、様々な倫理的視点を探るため、新しい環境に飛び込みたいと思うようになった。

その一つに大学のキングズ・インパクト投資研究会に参加したことがある。ここでは共同研究や議論を通してグローバルな課題に対する金融的解決方法について模索している。この研究会のリサーチ部門のアソシエイトとして活動する中で、企業や投資家が社会問題に対して抱く多様な倫理的な視点を学んだ。この学びによって実社会における「正しさ」についての理解が深まったように感じている。

また、来学期はカナダのトロント大学で学ぶことに決めた。そこでは哲学と倫理学を取ろうと計画しており、学術的な倫理が今まで実践で得たものとどのように異なっているのか学ぶことを楽しみにしている。

人生を賭けて探りたいと思える問いに出会ってから更に主体的になったように思う。それに伴って、未来に何が待ち受けているのかを予想することがだんだんと難しくなってきた。しかし同時に、これから待ち受ける可能性を想像して胸を躍らせている私がいるのだ。（会報編集部抄訳 The Japan News 2017年5月4日）

キングズ・カレッジ・ロンドン

ロンドン大学を構成するカレッジで1829年に英国王ジョージ4世と初代ウェリントン公爵によって設立された、英国で最も権威ある大学の一つ。卒業生には作家のトーマス・ハーディー、バージニア・ウルフなど。

インパクト投資研究会の研究部会メンバーに囲まれた後藤悠香さん（左から2人目）＝本人提供

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイト（http://ryu-fellow.org）へ。

英語の原文はhttp://the-japan-news.com/news/article/0003690039でお読みいただけます。